

常龍山大神宮  
天照御祖神社



古くからこの地方の開発鎮護の総守護神としてあがめられている。鎮座する常龍山は、太古より神々の鎮まり巫す丘、御山と尊ばれ、山上の古大木跡は神々の憑依する神籬、神霊のやどるしし勧請木で、その周辺も含めた特別な祈願を籠めた祭場であった。太古神殿ではなく、神籬としての大木と磐座に神々を祭った古代祭祀形態の信仰であった。

常龍山碑によると今から1200年余前に征夷大将軍坂上田村麻呂が蝦夷軍の総帥大墓王[タモノキミ]を滅ぼし、その残党である常龍鬼(鬼とは大和軍が敵対する強い大将に名付けた言葉で常龍鬼とは真の蝦夷の大将であった)を唐丹の村で討したのだった。

ところがこの霊は怨霊[おんりょう]として荒びた為、この霊を慰めしずめることを祈って、山上の一角に十一面観音像を安置した小さな堂を建立し、それまで祀ってきた天照大御神をはじめ天神地祇[あまつかみくにつかみ]と共に合せ祀るようになった。

この堂建立により神仏習合の信仰となり、神社付属の別当寺として常龍山光学寺の成立も、のちにあったが、その後星霜を経て寺は荒廃した。

社の祭祀家として続いた河東家の修験覚善院は、江戸初期社殿を造営。1618年には山下の常龍山宮拜所を兼ねる岩ノ沢神社(通称岩乃沢権現)の獅子頭が常龍山に移管奉納され、山上に移し安置されて常龍山大権現と尊ばれ権現神楽が舞われるようになった。また太古より神々の光飛来臨の伝統は寛文の頃も続き、南部領平田村の新山権現の神が国境を越えて再三飛来したと縁起にある。

文化年中葛西昌丕[まさひろ]は二十四人とはかり境内を広め神殿拜殿等を造営、更に、河東[かとう]大覚院[だいがくいん]が本郷の村上音吉外七人と共に伊勢神宮に詣り神祇官に請うて神霊を受け神々の御分霊を奉遷した。

1869年、政府は神仏混淆を禁じ、十一面観音像は本郷の福寿庵に移し祀った。かつ修験を廃し、純神道とし社号を天照御祖神社とし、1872年村社となった。

式年大祭で奉納されてきた、主な神楽並びに郷土芸能

神楽

常龍山御神楽[片川地区]



市指定文化財 1980年3月28日  
「片岸御神楽」は常龍山大権現といわれ現在天照御祖神社に奉納され、「権現さま」と称する獅子頭を持って舞う踊りである。御神楽に奉持される「権現さま」は初め「岩乃沢権現」といわれ、赤獅子頭であったのを、1626年に常龍山に安置され「常龍山権現」として奉持されるようになり、大津波や凶作、悪疫の流行の時、この「権現さま」を持ちだし、危険払いのために舞ったのがそのはじめであるといわれる。「権現さま」といわれるところからみると多分に山伏神楽の系統ではないかと思われるが、現在の舞型がいつ頃定まったか不詳である。

伊勢神楽[本郷地区]



本郷伊勢神楽は伊達藩政時代以前の事である。その後も藩政時代に至っても代々藩主がこれを信仰して現在に至っている。海の見える高台にある大杉神社に伊勢本宮より御神体を迎えお祭りを行なったのが始めと言われている。伊勢神楽は代神楽とも言い、そのため獅子舞により家室内に舞込み悪魔払い・火伏せ・無病息災・家内安全祈禱舞をする伊勢参りの代参の意味にもあたると言われている。また昔から子宝に恵まれない方などにはオカメ舞に出舞すると子宝に恵まれるとも言われている。また身体の弱い方、頭痛みの方は獅子頭にかんでもらえば病が止むとも言われている。

伊勢太神楽[小白浜地区]



太神楽は地区の唯一のものであり、その起源も元禄年間にさかのぼるといふ。鎮守八坂神社の祭典に奉納され、常に神輿の守護職として渡御の最前列にあり、先達としてその露払いの大任を果し、その大役を勤めている。幾多の災害に痛手を蒙りながらも朽ち果てる事なく引き継がれ伝承されている。当時特に60万石の家臣千葉長門守、木村土佐守の城主の絶大な庇護のもとにあり、地区の船主・船頭たちのたゆまぬ協力によって伝承されている。太神楽の舞は「通り舞」「剣舞」等あり、幕付きの獅子頭をかぶって踊り、幕尻を持つものが後につく。踊り手は「御弊」と「鈴」、「剣舞」の時は「御弊」と「剣」とを手に持ち舞う。「女舞」「おかめ」と称す、女装の衣装をして「鈴」と「扇」を手にして獅子の先になり舞をする。囃子には、笛・大太鼓・小太鼓を使用し悪魔払い。家内安全、商売繁盛を祈念しながら舞が演ぜられる。

荒川熊野権現御神楽[荒川地区]



荒川鎮座熊野神社は、1187年、後鳥羽天皇の御代に海上安全、火防、五穀豊穡の守護神として紀州熊野より分霊を勧請し、当地に熊野大権現を建立安置したのが始めと言われている。御神楽、即ち権現舞は庶民の信仰の対象として根強いものがあり、祭礼の先駆をなし諸霊を鎮める神であり、祝福を与えてくれる神であると信じられ、常に信仰のお供をして厄払いをする役目があると信じられ、そのように演ぜられ出現している。御神楽は創立800年の信仰と共に伝承、熊野権現の象徴として御獅子を型どり、威厳があり、神が御獅子の姿に化して、この世に現れ悪魔を退散させる事を誓って舞にしたものと言われている。曲目は、渡り囃子から始まり、御神楽、地の守、駒囃子、太神楽と四つの舞で構成され最後に御神楽を舞渡り囃子で退場する。

虎舞

小白浜虎舞[小白浜地区]



虎舞は海岸特有のものであり、囃子舞ともに勇壮で、本来の獣性を有し、熟睡から醒めた猛獣の所作で、海で生きる者の血をそそり、浜っ子の気風をそのまま遺憾なく発揮している。由緒については、三嶋家の祖先が浜の不漁続きの時に海に先きる若者を鼓舞激励する為工夫創案したものと伝えられている。「三嶋の虎舞」は、囃しことばに「三嶋の虎舞はね虎舞一杯のまねは気がすまねえ...」とあることから極めて勇壮な虎舞である。

大石虎舞[大石地区]



慶長年間奥州の豪族葛西三郎の家臣であった、新沼善次郎が気仙の立根に伝えたのが始めという。虎舞はその乱拍子とともに頭の揺れ動き、その演技のいかんにより、その年の豊凶を占うとされ、災厄を払って豊漁をもたらすという、心意の働いているものと言われる。和藤内が虎の背にまたがって。「天照皇太神宮」の神札をかかけるところは獅子舞の根源である伊勢信仰が反映しているものと思われる。舞は2部に分かれ、1部は「笹踊り」猛虎を奪い合う場面。2部は「御神楽」猛虎を承服させ、敵軍を家来にして御祝をする場面。

太鼓

花露辺海頭荒神太鼓[花露辺地区]



唐丹町花露辺に鎮座する「海頭荒神神社」から、その名を取ったもので、今から約60年前の「釜石さくら祭り」に花露辺地区の青年会が中心となつて手踊り太鼓として演奏したのが最初である。それ以来、太鼓の師匠の高橋和雄氏が中心となって「馬鹿ばやし」というリズムを基礎として創作を重ね、1982年に現在の5部構成をもって演奏するようになった。第一部「そろい太鼓」、第二部「荒神太鼓」、第三部「御祝太鼓」、第四部「大漁太鼓」、第五部「みだれ太鼓」

桜舞太鼓[本郷地区]



本郷地区の手踊り太鼓として、1953年に発足した。特徴は、桜の花びらが舞踊る様をイメージした、一糸乱れぬ勇壮な撥さばきにあり、技を考案した三浦徳松氏の指導のもと、その技を磨き約60年間守られてきた。1989年に、本郷青年会を廃し鼓舞桜会を発足し、自由な発想を持って和にこだわらない創作活動を行っている。

手踊り

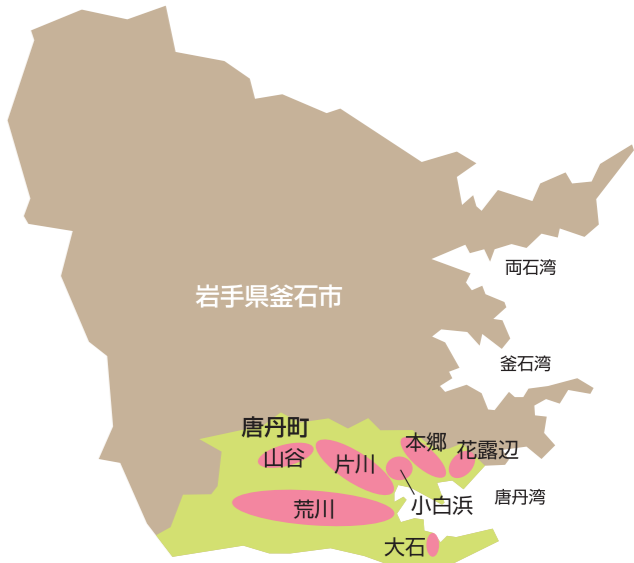
小白浜手踊り[小白浜地区]



本郷手踊り[本郷地区]



花露辺手踊り[花露辺地区]



侍組の各地区別の役割

本郷



御徒組



杖供組



杖引組



御鷹匠

小白浜 御道具組



御徒組



御旗砲組



御並槍組



御弓組

その他、袴姿の氏子多数が加わります。